

## 報 告

# 「竹ツリー」解説

石川正一\*1

キーワード：竹 ツリー ブラックライト 蛍光材

## 1 はじめに

今回の解説は山口福祉文化大学（山口県萩市椿東浦田 5000 番地）中央広場（約 1500 平方メートル）において、2007 年 12 月 19 日～22 日日（写真 1）、2008 年 12 月 17 日～21 日（写真 2）、2009 年 12 月 16 日～21 日（写真 3）の 18 時から 20 時の間に発表した作品「曳航」「曳航Ⅱ」「曳航Ⅲ」と「漁り火」を対象とする。

本作品は三つの基本コンセプトによって制作を行った。その一つは現在の日本の竹林事情であり、二つめは光と闇に対する著者のイメージである。また、三つ目はそれぞれの二つの要素に、山口福祉文化大学のイメージを重ねたものである。

作品は個人の作品としての位置づけと、山口福祉文化大学の行事としての位置づけ、また、学生に対しては教育的な意義が含まれている。本稿では、著者が本作品を制作する上での作品に対するコンセプトを中心に書き進めながら、単なる作品解説にとどまらず、制作過程に見られる出来事など、多岐に亘って述べるつもりである。

なお、「竹ツリー」とは「竹の造形物に蛍光材を塗布し、周囲からブラックライトで照射することによって発光させたモニュメント」と、ここでは定義する。

## 2 三つの基本コンセプト

### ①日本そして萩市の竹事情

日本の竹林の現状は、一言でいえば「荒れ放題」である。

日本には三大有用竹と言われるマダケ、ハチク、モウソウチクがある。有用竹という名称が示していると

おり、昔から日本人は生活の中で竹を利用してきた。神奈川県川崎市にある「日本たても園」に江戸期の日本家屋で、重要文化財に指定されている「旧伊藤家」がある。その床には全面に竹を張り、その上に筵が敷き詰められている。天井の垂木の部分や土壁の木舞などにも竹がふんだんに使われている。また、日本各地の民族博物館等を訪れてみれば、竹籠をはじめ、たけの皮を利用したタケノコ草履や笠など、実にたくさんの生活用品が竹から作られていることがわかる。

また、日本が原産といわれるマダケやハチクは、神聖な植物として扱われ、神事に多く用いられてきた。例えば、マダケを四方に 4 本立ててしめ縄を張り巡らせば、そこは神域にもなる。日本各地の神事にも竹は欠かせない。山口県下関市で行われる忌宮神社の 1800 年の歴史があるといわれる「数方庭祭」もその一つである。

さらに、江戸期頃になると中国からモウソウチクが伝わる。モウソウチクは主に食用として植えられた竹である。早ければ正月から 4 月頃まで日本の食卓を彩る。伝わった時期や場所については諸説あるが、鹿児島県の仙巖園に「江南の竹林」といわれる、日本で最初のモウソウチク林がある。

このように竹は日本人の衣、食、住や精神文化とも深くかかわってきた。また、竹は人間の手によって移植されて各地に広がっていった。自給自足を常としてきた地方の人々の暮らしは、家屋を中心に水田、畑、里山、そして竹林と共に暮らしてきたのである。

しかし、戦後の高度経済成長による大量生産、大量消費の時代の到来とともに、日本人の生活は一変する。

\*1 山口福祉文化大学 ライフデザイン学部

人々は木や竹や藁などの自然素材から石油製品をはじめとする人工素材に変わり、「作る生活」から「買う生活」へと移行していく。そして、地方の人々が都市に移り住むことによって、取り残された家屋は廃屋となり、周辺の田畑や里山も放置されて草木で覆われる。やがて周囲が様々な植物で覆われて森と化したとしても、放置された竹は根を伸ばし繁茂を続け、その面積を広げていくのである。

竹の種類は地下茎によって単軸型と連軸型に分けられる。日本の三大有用竹は全て単軸型である。単軸型の特徴は、伸びた地下茎にタケノコが生えて広がっていく。そのため、竹を放置しておけば、無尽蔵にはびこる可能性がある。一年に伸びる根の長さは、平均 6メートルとも 8メートルともいわれている。「竹は山を登る」のたとえがあるように、竹を放置しておけば、1年で6メートル、10年で60メートル、50年では300メートルの勢いで根を伸ばしていることになる。

また、タケノコは3ヶ月で高さ十数メートルにも達して成竹となる。さらに、周囲に高木があれば光を求めて、その上に伸びる。そのために、一端森林に進入すれば、周辺の木を枯らして繁茂することにもなる。そもそも、竹は人間と共生してきた植物でもあり、人間が管理することによってバランスを保ってきた。従って、放置することによって繁茂するのは当然である。現在も荒廃した竹林の面積は広がる一方であり、萩市においてもそれは例外ではない。

萩市周辺の竹は、かつて「北浦のマダケ」と呼ばれ、節間が長く負担力の強い良質のマダケが生産されていた。北海道のささら電車の雪を掻く竹ブラシは、萩市近辺の竹である。また、竹産業も盛んであった。特に簾の生産は盛んで、アメリカに輸出も行っていた。さらに、戦後の紙不足の時代には、竹を原材料とした日東製紙萩工場が昭和 23 年に操業を開始する。しかし、昭和 36 年には製紙技術の向上により、あらゆる闊葉樹から製紙が可能になったことで、廃業となる。簾も諸外国との価格競争に勝てず、次第に姿を消して萩の竹

産業はほとんど失われていく。1982年に出版されている写真集「萩の今昔写真集」（角川政治著）中で、1957年として萩市で最後の竹細工屋を紹介している。

竹ばかりではないのかも知れないが、この頃から日本の里山をはじめ、森林や地方の耕地は荒廃し、その結果として第一次産業の衰退が顕著になっていく。地域の産業や文化は豊かな資源との関係が深く、良質の資源が産業や文化を育てるのではないだろうか。竹のように人間が管理しながら育てることができる資源を見直し、我々の生活を再構築する時期が来ているようにも思われる。現代社会がかかえるゴミ問題や二酸化炭素問題などの環境問題もこの延長線上にあるのではないだろうか。

本来、日本は育てる資源の豊かな国であり、それを活用してきた長い歴史を持っている。そして、この育てる資源を活用する新たな技術革新こそ 21 世紀の課題でもある。そのためには、戦後失われてきた自然と人間との豊かな関係を再び取り戻すことが重要であり、育てる資源の今日的な活用方法を見出す必要がある。それは、けして衣食住やエネルギー問題と密着したもののだけでなく、新たな文化創造も重要である。竹を例にとれば、近年竹灯籠で街を飾る活動や北九州市立大学の竹川大介氏等が考案した「スタードーム」など、新たな竹を利用した試みが行われている。目的は異なっているが、こうした活動をとおして、現代に竹の利用が促進されていることは事実であり、人々と竹との新たなかかわりが生じる可能性を含んでいる。今回の「竹ツリー」もその一つと著者は捉えている。

また、竹のしなやかさと固さ、そして空洞をもつ形状は自然界の中でも特異であり、この特異な竹を利用したツリーの造形性は多くの可能性を秘めており、魅力に満ちた材料である。

これらのことを念頭に、竹の性質を十分生かして制作することが第一のコンセプトである。

## ②光と闇にたいするイメージ

以下は、山口福祉文化大学の夜を過ごして気づいたことから始まる。

近年著者は真っ暗な夜にたたくことが少なくなった。真っ暗というのは大げさかもしれないが、周囲を山で囲まれ、僅かに日本海を望める山口福祉文化大学は周囲に民家も無く、さらに深夜12時を過ぎると学内の外灯がすべて消され、月の無い夜など一步進むのも困難な状況になる。そんな中に1人たたくと、不思議と視線は明るい光を求める。最初に萩沖の日本海でイカ漁をする漁り火の強い光を見つける。次に満天の星である。足下や周囲の山を見ることは無い。いずれにしてもよりどころを光に求め、自己の存在感を認識しないことには不安がつる。しばらく星を見ていると、目は暗さに慣れてくる。同時に見える星の数も増える。まるで、星の牢に閉じこめられたようである。しかし、目が暗さに慣れても、星明かりだけでは建物を浮かび上がらせる程の明るさは無い。それでもさらに目を凝らすと、山と空と建物の距離によって生じるのだろうか、黒い建物ががすかに浮かび上がる。様々なものが闇の中では一つであったが、光によって分けられていく。しかし、それは人間の勝手な視覚に基づく認識なのかもしれない。

岡山県直島の「家プロジェクト」の中でジェームズ・タレルが安藤忠雄の設計で発表している「Backside of the Moon」(1999年)の作品を思い出す。「南寺」と名付けられた建物の中に蛍光管、タングステンライト、木、白ペイントで制作されている。建物内部に入る時には暗闇で一步も歩くことも出来ないのだが、5分程椅子に腰掛けていると薄ぼんやりと壁に光が見えてくる。建物を出るときには入場した時の暗さが嘘のように明るく、道が見える。光(闇)と人間、そして時間を強く意識させられる作品である。

山口福祉文化大学の闇は人工ではない。それだけに、命の気配も周囲に感じる。また、聴覚もかすかな音を逃すまいと集中する。遙か遠くに漁船の音が聞こえ、

次第に大きく響くようになる。

星と漁り火と漁船の音の中で、少しずつ手足を動かしながら、目的とする方向に進もうとすれば、昼間の記憶をたどりながら歩く以外にない。いずれにしても遙か遠い光を頼ることはできない。逆に目を閉じて歩く方が大胆な歩みを可能にする。古代の人間が月の無い夜に星だけを頼りに外を歩いたのだろうか。想像がつかない。

しかし、月があれば、世界は一変する。満月の夜など、天頂の月はまぶしく、まともに見ることすらできない。周囲を見渡せば色も冴える。人陰はくっきりと道にかたどられ、遙か数百メートル先まで見渡すことができる。月夜がこんなに明るいことを忘れていた。幼少の頃、田んぼの畦道を家族で歩いて祖父母の家を往復していた時のことを思い出す。夜に家族で影踏みをしたことや、いつまでも月が付いてくること不思議さを真剣に悩んだことを思い出す。

日本人は月の光を大切にしてきた。京都の桂離宮は観月を演出する最高傑作の建築と庭園であると言われている。著書は「月見台」に立ったことはないが、たぶん月明かりの柔らかい光に照らされて配置された池泉や築山、樹木や岩、そして東屋などの建造物がくっきりと浮かび上がるに違いない。そして、池からも反射する月明かりはそこに立つ人間の姿を美しく照らし出し、一種のナルシズムを演出する場になるであろうし、人間の創造性を喚起し、庭園との語らいを弾ませることだろう。やがて夜明けと共に全ては静まり、風景は沈黙する。

確かに仄かな光は創造性を喚起する。闇から次第に放たれる月は多くの曲想を思い起こさせ、多くの詩や小説のモチーフとしても使われてきた。

日本海に接する山口福祉文化大学の闇に浮かび上がるモニュメントは、闇に逆らわず、星が輝き、月が輝き、そして、創造力を喚起させるイルミネーション。言い方を変えれば、月や星と一体化したイルミネーションの創造が第二のコンセプトである。

### ③山口福祉文化大学に対するイメージ

二つの基本コンセプトと共に、山口福祉文化大学の前途を栄光あるものとして、参加者の願いが一点に集中し、確認できるコミュニケーションの場としての空間も演出したいと考えた。

また、教育の場である限り、一つのシンボルを中心に、学生たちや教職員、そして一般市民が参加して時間と空間を共有できる場としての展開がはかれることが重要であり、点から線へ発展拡大できるイメージを醸し出すことがねらいである。そのためには斬新でシンボリックな作品を創造する必要性を感じると共に、広い空間の中で自由に人々が想像を巡らせる場を提供したいと考えた。

### 3 制作過程

以上の基本コンセプトによって制作をおこなった。

制作のイメージは三つの具体的なテーマで構成した。一つは中心になる竹のモニュメントであり、山口福祉文化大学を輝かしい未来に向かって引っ張る「船」とした。この部分は「竹ツリー」の本体であり、竹の力強さとしなやかさを表現している。二つめは、船が漂う様々な「波」であり、竹の切り口である円に着色し、個性と自由な雰囲気を醸し出す。三つ目は日本海に浮かぶ「漁り火」をイメージし、周辺に配した。

全体の作品のタイトルは2007年を「曳航」とし、2008年を「曳航Ⅱ」とし、2009年を「曳航Ⅲ」とした。

制作する上で配慮した点は、材料である竹の様々な形状を生かすことと光である。竹の切り口である丸い形状やしなやかに曲がる曲線、そして、細くてもまっすぐに伸びる生命力あふれる線、それらの特徴を生かし、ツリーとしての高さを意識して制作を行った。また、冬期の日本海から吹く風に対応できる強度としなやかさも制作する上での配慮すべき点となった。

当初は電飾によるイルミネーションも検討したが、竹のしなやかさなど線の美しさを表現できないことや光度が強すぎる点、また高額となることが課題とな

り、不可能であった。そこで著者がかつて蛍光石とブラックライトによるトンネル壁面の装飾に参加した経験があり<sup>註1</sup>、竹に蛍光石の粒子を接着剤で固着することも考えた。しかし、価格や接着の技術面において実現不可能であった。だが、竹に電飾を付けるのではなく、竹そのものを光らせることはイメージに合ったものであり、ブラックライトを使用するアイデアを生かすこととした。また、蛍光塗料を竹に塗布することによって、竹の曲線も生かせるメリットもある。しかし、蛍光塗料を購入する予算が無く、悩んでいる時に友人<sup>註2</sup>から蛍光材は生活の中のいたる所にあるのではないかと指摘を受けた。そこで早速ブラックライトを購入し研究室で照射してみると、驚いたことに衣服や書籍など、様々なものが光った。この時の感動は同時に90%の完成を実感できた。また、我々の生活の中にたくさんの蛍光材が使われていることも分かった。その中で、環境に配慮し教育的にも意義のある、使用済みのコピー用紙を竹に貼り付けて光らせる等のアイデアもあったが、野外であることや、労力を考慮して断念することになった。最終的には安価に入手可能な粉末洗剤を糊で竹に付けることにした。このことによって比較的容易に竹を光らせることができた。2007年12月の竹ツリーは粉末洗剤と一部蛍光塗料で光らせることとした。

「竹ツリー」の本体は直径16メートルの円形内に竹50本程度を使用し、高さ約4メートルの本体となる部分を組んだ。ツリー上部の放射状に広がる竹は、六つ割りにした長さ2~3メートルの竹200本あまりに粉末洗剤を塗り、生花のように本体にさした。粉末洗剤の付着の方法は洗濯糊を刷毛で竹の内側に塗り、釣り竿の長いプラスチックケースに洗剤を入れ、一緒に振ることで付着した。

周囲の波の表現は竹を幅10センチ程度に輪切りにした約500個余りのパーツに黄、赤、オレンジ、緑の蛍光塗料を塗布した。(写真4)

また、漁り火を表現した部分は、約1500平米の広さ

に、長さ2メートル弱の竹を一節だけ残して六つ割りにし、六本の足で支える作品と、その下の中央に高さ25センチ程度の竹筒を置き、中に蠟燭を入れて灯した。その数約50セット程度を全体に配した。(写真5)

基本的な作品の構成や配置については方針が決まり、16メートルの円周に40ワットのブラックライト18本を配置して周囲から照射し完成した。

しかし、次年度への課題も残った。ブラックライトは光の方向を竹ツリーに向けるように段ボールを加工してボックスケースを作り、その中に納めたが、段ボールで作ったために雨や風に弱く改善が必要であった。また、「竹ツリー」の中心部は4メートル程の竹と周囲を囲むように周回ごとに50cm程度ずつ短く切った竹を組み、麻縄で束ねた。強風の吹く季節であり補強を行ったが、この部分の制作が最も困難を伴い、次年度の課題となった。

2008年は、制作過程をより安全に簡易的にすることが目標であった。この「竹ツリー」を山口福祉文化大学の伝統行事にしていくためには、最終的に誰でも制作出来る方法を構築することも重要である。

2007年に課題となった、「竹ツリー」の本体部分はドラム缶を加工し、四方から直径20ミリ程度の鉄筋で支え、その中に竹を積み込むことで容易に竹を立てることが可能になった。また、ライトボックスは木で制作し、繰り返し使用が可能になったが、風雨に十分の耐久性が得られるまでには改善されていない。

使用した竹の量は2007年が約100本余りであり、2008年と2009年は150本余りを使用している。また、竹ツリーの蛍光材が2007年は粉末洗剤であったが、2008年以降は蛍光塗料を使用した。また、2008年度の作品には学生のアイデアなども加え、部分的にネットを使用した。

完成の最後として、音響効果も加わり、クリスマスソングやジャズを流した。

#### 4 おわりに

山口福祉文化大学は山口県萩市に位置し、2007年4月から大学名を改称し、社会福祉士などを目指すライフデザイン学部ライフデザイン学科として、再スタートを切った。新たな大学のイメージを発信するためには新たなシンボルも必要である。そんなことを考えていた時に、一人の職員から学生が集まる施設(交流会館)にクリスマスツリーの制作依頼があった。

萩市は12月になると市内のいたるところでクリスマスイルミネーションが輝く。そんなことがきっかけだったのかも知れない。しかし、小さな素朴な夢ほど大きな夢の入り口であり、イメージを拡大させてみた。周囲の教員にも意見を拝聴した。そして、この大学でしか出来ない、この大学だからこそ出来るツリーを考えることとした。それが「竹ツリー」であった。

2007年度は制作費が無く教職員をはじめ、萩市民の方々にカンパをお願いし、ブラックライト18本分を購入した。その他は廃材や安価な材料でまかなった。そして、教職員をはじめ多くの学生や地域のボランティアの方々の協力を得て完成することが出来た。

点灯式は大学関係者や萩市民の方が参加し、初めて見る「竹ツリー」に歓声が上がった。しかし、翌日は誰も来ない有様であった。理由は簡単である。制作に奔走するあまり、広報活動を十分に行っていなかったためである。本音は、どう評価されるのか不安が大きく、広報には消極的にならざるを得なかったのである。しかし、一部のマスコミの取材や口コミによって、次第に話題が広がり、わずか5日間の点灯であったが、200人程の一般の方に来場していただき、遠くは北九州から来られた方もいた。

新たな「竹ツリー」の出発としてはまずまずの評価をいただいたように思われる。光あふれる都会では「竹ツリー」の効果は半減する。暗いからこそ、その存在感を際立たせるブラックライトによる「竹ツリー」はまさに安価で省エネな光でもある。同時に竹の造形美が際だてば作品としての評価も高くなるであろう。月

よりも暗い光が風に揺られて揺れる姿、竹と竹がすれる音が共鳴し、豊かな時間を紡ぎ出していたように思われる。

しかし、「竹ツリー」にも二つの大きな不安がある。一つはブラックライトが一種の紫外線であり、人体への影響が懸念される。一般的には害のない紫外線となっているが、そこに100パーセントの保証は無い。そんなことに配慮して点灯時間は2時間とし、なるべく近距離で見ないようにライトはボックスを付けて見学者の視覚に光が入らないように配慮した。最近ではブラックライトLEDも開発され、益々人体への安全性が高まっているようでもある。二つめは、蛍光塗料の環境への負荷である。なるべく有害な塗料は避けているが、廃棄する場合には十分注意を払いたいと考えている。

ブラックライトが作り出す新たな可能性は世界中で試みられている。チェコのプラハはブラックライトシアターが有名であり、演劇やパネルシアター等、様々なパフォーマンスがおこなわれている。「竹ツリー」もこうした表現とのコラボレーションが今後の課題として、益々夢を広げていきたいと考えている。

#### 付 記

2008年及び2009年「竹ツリー」の制作活動は平成20年度及び平成21年度山口福祉文化大学学長裁量経費研究費助成を受けている。

#### 註

- 1) 山口県玖珂郡錦町（当時）の「きらら夢トンネル内」に2002年～2003年にかけて山口県立大学の美術部の学生と一緒に約100メートルに及ぶ壁面を蛍光石で装飾した。
- 2) 清泉女学院短期大学（長野県）講師 桜井 剛氏 美術担当

#### 参考文献

- 1) 佐渡靖紀 「竹林適正管理技術の開発 ―竹林拡大の実態調査―」 山口県林業指導センター 平成14年度研究年報 2004

#### 謝 辞

本制作を行うにあたって多くの方のご協力に感謝申し上げます。特に、以下の方々には制作に際し、多大なご尽力をいただき、厚くお礼申し上げます。

有田悦子、桂木美和、木村誠吾、国広勝代、小池美晴、是恒温子、（故）佐古山進、佐々田拓実、佐々田希、永田徹、長元宏樹、野崎瑞樹、堀 保男、松浦龍晃、平田 勉、平山真一郎、福田みのり、藤本夏美、松岡幸子、村本名史、楊井正明、八尋茂樹、山口利勝、吉野光明、野球部の皆さん

（アイウエオ順・敬称略）



写真1 「竹ツリー」 2007 「曳航」



写真2 「竹ツリー」 2008 「曳航Ⅱ」 撮影：岡崎一雄



写真3 「竹ツリー」 2009 「曳航Ⅲ」

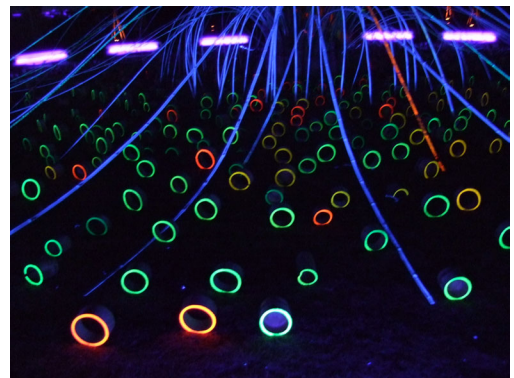


写真4 波

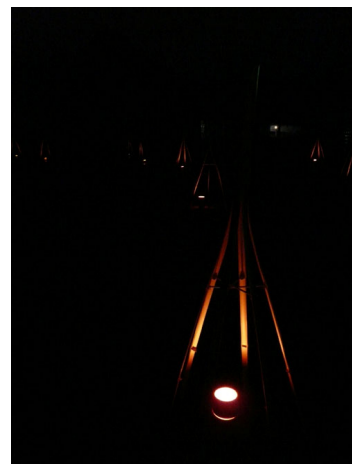


写真5 「漁り火」